連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部鹿毛敏夫教授の「足利義満～室町幕府の最盛期築く～」が掲載

●大分合同新聞朝刊　2022年2月25日(金)

大友時代を生きた人々

鹿毛　敏夫

足利義満

室町幕府の最盛期築く

およそ400年間の「中世」という時代の中で、足利氏一族が15代にわたって将軍職を務めた政権を「室町幕府」と呼びます。この時代は、初代尊氏の14世紀前半から、最後の将軍義昭の16世紀後半まで、230年以上続きました。

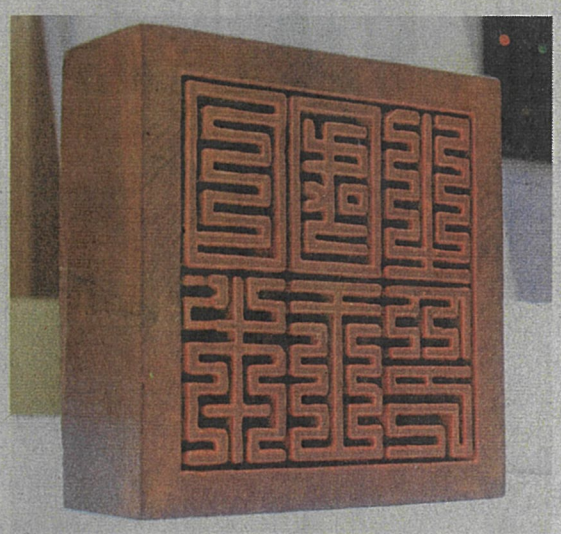
15人の将軍の中で、室町幕府の最盛期を築いたのは、3代足利義満（1358～1408年）でした。鹿苑寺（金閣）を建立して華やかな北山文化を開花させたことが知られますが、それ以外にも、60年にわたって南北に分かれて抗争する朝廷の合一を果たし、また、山名氏清ら有力守護大名の勢力を抑えて幕府の政治権力を確立させます。そもそもの「室町幕府」という名称自体、義満が将軍家邸宅を京都の室町に移したことに由来するものです。

義満の功績は、日本の外交と経済にも及びます。応永8（1401）年8月、義満は、「日本准三后道義」の名で起草した国書を、同朋衆（将軍側近）の祖阿と博多商人の肥富に託して中国明朝の建文帝へ送ります。これを受けた建文帝は、義満を「日本国王」と認める詔書を作成して臨済僧の天倫道彝ら使者を立て、彼らは翌年9月に「北山殿」（金閣）で義満に接見しました。ここに、日本と中国の国交が、平安時代の遣唐使廃止以来およそ500年ぶりに再開されたのです。義満は、同11（04）年に、建文帝から皇位継承した永楽帝より「日本国王」金印を賜っています。

この日明外交は、日本側が明の皇帝へ貢物を献上してその返礼を受ける朝貢の形式でしたが、遣明船による日明貿易は、運搬費や滞在費などを明側が負担するため、日本側の利益は莫大でした。その輸入品は銅銭・生糸・陶磁器、輸出品は硫黄・銅・刀剣・扇など。特に硫黄は、火山のない中国側が火薬の原料として欲しがる重要軍需品で、義満は九州の守護大名大友・島津両氏にたびたび使者を派遣して、豊後と薩摩から大量の硫黄を調達しています。

義満が15世紀初頭に始めた日明貿易は、こうして硫黄の輸出を軸に16世紀半ばまで継続しました。当初は「日本国王」と認証された室町将軍自身が行う「国家外交」でしたが、やがて将軍の権威が衰え、幕府が経済的に困窮する15世紀後半になると、有力守護大名の細川氏らが船団経営権を買得。そして16世紀半ばの派遣最末期には、戦国争乱の中で紛失した金印の印面を精巧に模造した「日本国王」木印を使って、大内・大友・相良など西日本の地域大名が日明外交を主導するように変質していくのです。

（名古屋学院大学国際文化学部教授）



大内氏らが日明外交で使用した「日本国王」木印（毛利博物館蔵）

＝月1回掲載＝